

Title	TrollopeのThe Warden : アメリカ小説の立場から
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外国語大学学報. 16 p.165-p.177
Issue Date	1966-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80262">https://hdl.handle.net/11094/80262</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Trollope の *The Warden*

——アメリカ小説の立場から——

大 井 浩 二

## Trollope's *The Warden*: An American View

Koji OI

In this essay the writer has studied Trollope's novel, *The Warden*, in the light of the American tradition. Starting from the fact that Trollope and Hawthorne are mutually attracted, he has demonstrated that the English novelist is more interested in depicting a "social man" than the American romancer, whose *The Scarlet Letter* supplies a sharp contrast to the novel in question.

### I

イギリス小説家 Trollope の作品をアメリカ小説の立場から眺めようというのは、かなりひねくれた物の見方のように思われるかも知れない。イギリス小説の伝統にてらしてアメリカ小説の特異性をさぐるのならともかく、アメリカ側から大西洋のかなたの小説を考えようとするのは、順序が全く逆ではないか、という非難もあるにちがいない。たしかに、イギリス文学から独立したアメリカ文学という意識が強く残っていた戦前であれば、いわば分家のあり方から本家の行動半径を測定する態度には想像もできない困難さがつきまとったことであろう。

しかし、僕などのように戦後になって、世界文学の一環としてのアメリカ文学にいきなり接した者にとって、ある意味ではイギリス文学とアメリカ文学は対等の存在であった。かならずしもイギリス文学の影の下にアメリカ文学を見なくてもいいのではないか、という考えを持ってくるとしても、あまり不思議なことではないかも知れない。にもかかわらず、アメリカ小説のアメリカ性について考えようとすれば、やはり最も近い親類関係にあたるイギリス小説を引き合いに出し、それとの比較対照を試みるのが近道であることも否定できない。

いまここで僕が盲蛇に怖じずの諺通りに、Trollope の代表作 *The Warden* を取りあげようとするのも、そのような下心があつてのことだ。とくに、この作品と Hawthorne の傑作 *The Scarlet Letter* とをかみ合わせるにより、イギリス小説の特性に光をあて、大西洋をへだてた二つの小説の流れにおぼろげながらも竿をさしてみようという魂胆であるのだ。従つて、僕のここでの態度は、おのずから巨視的とならざるを得ず、いわゆる「分析」にはあまり注意を払わないことになる。とはいふものの、なぜ Trollope を対象として取りあげねばならないのか。いや、そう言えば、Hawthorne まで引き合いに出すのはいかなる理由によるものなのか。これらの疑問に答えておくのが、話の順序というものであろう。

*The Warden* や *Barchester Towers* の作者が Thackeray の「息子」と呼ばれ、イギリス小説の偉大なとは言わないまでも典型的な作家の一人であることには疑問の余地はあるまい。ある批評家に従えば<sup>(1)</sup>、「イギリス小説の史的かつ美的な発展における一要因としての彼の価値は、彼が力強く（足音が聞えるほどに）伝統の中央を歩いているということである」とさえ言いきることができるのだ。彼の代表作 *The Warden* をここで取りあげることは、ほかならぬイギリス小説の見本を、それも一級品の見本を手にするを意味する。この点がまず僕の興味をとらえたことは、あらためて記すまでもないことであらう。

これに劣らず僕の注意をひいたのが、Trollope と Hawthorne の個人的な結びつきであったことも、ここで忘れずにつけ加えておく必要がある。Hawthorne はイギリス滞在中に書き送った手紙の中で Trollope の作品を激賞し、それが全く彼の「趣味」に合っていることを告白している。このイギリス人の小説は“solid”で“substantial”であり、“beef”の力と“ale”の靈感とをかりて書かれていることを指摘したあと、「巨人が地球から大きな土塊を切りとり、見せ物にされているとも知らずに日常生活の仕事にいそしむ住人たちをそのままガラスのケースに納めたかのごとくに現実的」であることを強調していたのであった。リアリストとしての Trollope の本質を見事に読みとった発言と言わねばなるまいが、その Trollope の作品が Hawthorne の「趣味」に合致するとは、*The Scarlet Letter* の作者の世界を知っている僕らにはいささか意外な感じがしないでもない。

ここで僕が今更らしく指摘するまでもなく、Hawthorne はその作家活動の出発点からリアリストとしての態度を放棄していた。いわゆる“novel of manners”の作家たることは、彼の目的ではなかったはずである。ともあれ、*The House of the Seven Gables* の序文の中で、「作家

---

(1) Richard Church, *The Growth of the English Novel* (Methuen, 1951), p.171.

がみずからの作品をロマンスと称するときには、その方法と材料とについてある種の自由さを要求していることは言うまでもない」と書いたとき、彼は明らかにロマンス作家として細部の真実性を無視せざるを得ないことを宣言していたのであった。彼の活躍する舞台は「現実の世界とお伽話の世界との間のどこかにある中間地帯」(*The Scarlet Letter* の序文)であり、「現実的なものを強くあらわそうとしない詩の世界」(*The Marble Faun* の序文)に他ならなかった。

従って、Hawthorne の Trollope に対する賛辞の裏には自分自身に欠けているものに対する憧れの気持ちが働いていたことは明白である。アメリカ作家としての宿命を自覚した上での発言であったのかも知れない。いずれにしても、アメリカ小説とイギリス小説との距離を僕らに強く感じさせずにはおかないのだ。いってみれば、Hawthorne と Trollope を対にして考察することは両極端にある小説の伝統に首をつっこむことになるのだが、ここまで考えてきて、Hawthorne の作品に対する Trollope の批評を取りあげないのは、片手落ちというものであろう。そこには両者の本質的な相違がより明確に意識されているからである。

Trollope は Hawthorne の死後かなり長い論文<sup>(2)</sup>を発表しているが、その中で先に引用した Hawthorne の手紙に言及し、このアメリカ作家の批評が「驚くべき正確さ」で彼の創作における目的を伝えていることを認めている。登場人物を実際以上に「立派」にも「下品」にも描くことなく、読者が読者と全く同じ人間を作品の中に見出すように願っている、と Trollope は記しているのだが、この態度は細部の真実性を無視してもいいと主張するロマンス作家 Hawthorne の態度とはかなりの差があると言ってもよいだろう。

もちろん、Trollope 自身もこの「強固な相異点」(a strong divergence)に気づいている。彼自身の言葉を借りて言えば、Trollope が「できる限り人生に忠実に小さな絵を描くことを心掛けて来た」のに対し、Hawthorne は「可能性の限界にあるとは思われない人物や事件を取り扱っていた」のであり、「そのような限界は全然存在してもいい」とさえ言っている位なのだ。この結果、Hawthorne の作品の中では「ありふれた人生のありふれた要求」は無視されて、「想像力の世界」のみが描き出されることになる。いかにも見事に、Hawthorne の特異性を捕えた評言と言えるのではあるまいか。

しかし、僕はあまりにも Trollope と Hawthorne とのつながりにかかわりすぎているようだ。この二人の作家が本質的に相反する傾向の作家であることを明らかにしさえすれば、僕の目的に

---

(2) “The Genius of Nathaniel Hawthorne,” by Anthony Trollope, *North American Review*, September 1879, pp. 203–222.

は事足りるはずではなかったか。*The Warden* の世界の姿を Hawthorne 的な色眼鏡で見直してみようという僕にとって、二人の作家の作風が異質であればあるほど、双方の特質を対照的に浮びあがらせることができるにちがいない。

## II

*The Warden* がきわめてリアリスティックな世界であることは、これまでの説明を抜きにして考えても一目瞭然としているにちがいない。すくなくとも荒々しいドラマの展開するアメリカ小説のお膳立てに慣れている読者の眼には、Trollope の作品には何事も起らないかのごとくに思われるのではあるまいか。リアリスティックな、あまりにもリアリスティックな世界の展開と呼びたい位であるのだ。

たしかに、*The Warden* には事件らしい事件は発生しないし、かすかに持ちあがったいざこざも、池に投げこんだ小石の波紋さながら、時間と共に解決され消え去って行くばかりなのだ。一滴の血の流されることもない平和な世界としか思われぬのだが、実はこの表面的な平和さの背後にこそ、Trollope の作品をとく鍵がかくされているのではないだろうか。一見何気ないありふれた生活の底に、彼一流の「社会観」<sup>(3)</sup>が見事に展開していることを見落してはなるまい。それを見落すことは、そのままイギリス小説の最大の魅力に眼を閉じることには他ならない。

物語の冒頭で僕は Barchester と呼ばれる田舎町を紹介される。作者はさり気ない口調で、この町が「イギリス西部にある、商売の賑やかさよりも寺院の美しさや記念碑の古めかしさで名を知られた静かな町」であることを読者に説明しているのだが、この設定は *The Warden* 全体の世界を支える重要な土台であると言っても言いすぎではあるまい。Trollope の控え目な筆づかいにもかかわらず、小さな田舎町という舞台装置がいかにイギリス小説好みであることは疑うことが出来ないし、それ故にまた、この設定が果す社会的機能——主人公の行動を制限し拘束する人間関係の絆としての機能を忘れることは出来ないのだ。

しかも、Barchester は「静かな」「古い」寺院町である。教会内部の事情に詳しい者でないにしても、この集団においてピラミッド形の人間関係が成立していることは容易に理解し得るし、その拘束力が強固であろうこともほとんど説明を要しないほどであろう。いわば寺院を中心とする Barchester は、いかにも古めかしい都のたたずまいを伝えながら、実は最も現実的な世界であり、俗世間的な思惑が強く働く社会としての姿を僕らの前に現わしていると考えられるのでは

---

(3) ここで「社会観」(Sense of society)というのは、「政治、宗教、教育、哲学、経済、科学、その他公共

ないだろうか。現実社会の縮図として、人間関係の渦まく小社会としての機能を読み落すことは許されないにちがいない。

さて、物語のはじまったとき、主人公 Mr. Harding の生活にはいささかの不安の影も見られない。彼はすでに60才に近い老人なのだが、Barchester の町の“precentor”としてばかりではなく、養老院の“warden”をも兼ねることによって相当に裕福な生活を送っている。しかも、二人の娘のうち、長女は“bishop”の息子 Dr. Grantly と結婚しているし、Mr. Harding としては次女の幸福な将来を願うばかりという、全く平穩無事を絵に描いたような生活ぶりであるのだ。

たしかに、この老人の生活は平和で安定している。しかし、彼は Barchester という寺院町の中で、寺院関係の仕事もち、しかも寺院関係に有力な姻戚を持った老人である。あくまでも彼の日常生活は「寺院」という社会の枠組のなかで営まれているのであり、その故にこの「小社会」の拘束力から自由であることは不可能に近い。すくなくとも、この「小社会」の拘束力から逃れ、なおかつ従来の幸福感を味わうとすることは不可能であるにちがいない。言葉をかえて言えば、Mr. Harding が周囲の社会機構に適応している限り、彼の生活は保証され、人生に暗い影のしのび寄ることはあり得ない。この個人と社会との強固な連帯意識、この意識を抜きにして、*The Warden* の物語の発展を期待することは全く無意味とさえ極言できるであろう。

従って、Mr. Harding の依存する社会機構たる養老院の“warden”のあり方について、この「小社会」の局外者から疑義が提出されたとき、Mr. Harding の優雅な生活はたちまち危機にさらされる破目になってしまう。たしかに、不正収入を得ていたことは、彼のあずかり知らぬことであった。しかし、彼の“warden”としての地位が失われることは、そのまま彼の私生活における波乱を意味しているのであり、ここに Mr. Harding における公私の一体感を読むとすることはきわめて容易である。と同時に、この一体感が、すくなくとも表面的には彼の危機を解決する重要なモーメントとなっていることも明らかである。

というのも、Mr. Harding の問題は“warden”という社会的地位をめぐる発生したのであり、この地位に関する疑惑の雲さえ晴れれば万事は円満に解決するはずであった。事実、彼の事件は裁判沙汰に発展し、著名な弁護士に相談がもちこまれる。ここでその経緯をくわしくたどる

---

の伝統、価値、判断が役割りを果すすべての活動分野において、われわれが人間と人間との共同生活に関してもつ意識に同一でなくても、類似のもの」(John McCormick, *Catastrophe and Imagination*, Longmans, Green and Co., 1957, p.6,)ぐらいに理解して貰えばいい。

余裕はないけれども、いかにも仰山な大騒動の揚句の果に、事件は法律的には実に簡単に解決することになるのだ。この結果、Mr. Harding の社会的地位は確保され、彼は以前の幸福な状態に復帰することができた——すくなくとも、そうなることは可能であったといえよう。

実際には *The Warden* は意外な結末へと続いて行くのだが、ここまで読みすすめてきた僕らとしては、この作品にみられる社会の重みに気づかざるを得ない。いかにもずっしりとした寺院町の重み、その中で息づく個人の安定した生活、その破綻と社会的な解決——すくなくともアメリカ小説の立場からこの小説を眺めようとしている僕らにとっては、この重みは圧倒的であるとさえ言えるであろう。かつて *Times Literary Supplement* の論者が「イギリス小説は社会に深く根ざしている」ことを指摘し、「イギリス小説家にとって人間とは社会的人間のことであり」<sup>(4)</sup>と述べていた言葉を僕はここで実感をこめて思い出しているのだ。

たしかに、この点に関して言えば、*The Scarlet Letter* における社会的な重みは皆無と言わねばならない。すくなくとも、皆無に近いという印象を与えるのではないだろうか。たしかに、Hawthorne の作品といえども、社会が全く描き出されていないと言うつもりは僕にもない。といっても、人間が二人以上集まれば社会が構成されるのだ、などといかにももっともらしい意見を出すつもりでもないのだ。現実の問題として、*The Scarlet Letter* には社会は見事に実在している。開巻冒頭に僕らが見出すのは、Boston の町であり、この町の古ぼけた牢獄であり墓地ではなかったか。あるいは、鉄のような表情をもち、人間性の弱点に同情を示すことを知らぬ清教徒たちの姿こそ、僕らが最初に見出す風景であり、そこに Boston の社会を読みとることはさほど困難なことではないだろう。

一般的に言って、僕らはアメリカ小説における社会の不在を強調しすぎるのではあるまいか。Henry James のあまりにも有名になりすぎたあのアメリカに不在なもののリストのせいかも知れぬ。あるいは、アメリカ小説の非社会性、ないしは反社会性を攻撃した Lionel Trilling 教授のせいかも知れない。いずれにせよ、僕らはあの孤高な人間の魂を歌いあげている Melville の *Moby Dick* にしても、Ahab 船長の背後に *Pequod* 号の小世界を二重うつしにして考えざるを得ない。人間世界に背をむけた Thoreau の場合でさえも、背をむけた社会の存在は現実的であったのだ。ましてや、*The Scarlet Letter* における社会の有無という問題になれば、僕らはいささかもためらう必要はないのである。

---

(4) *The American Imagination: A Critical Survey of the Arts from The Times Literary Supplement* (Cassell, 1960), p.36.

にもかかわらず、ここで僕が言いたいのは、*The Scarlet Letter* には社会と個人との強烈な連帯感——*The Warden* において、その世界の土台を構成していた社会観は、どこにも探し出すことができないということなのだ。たしかに、Hawthorne の世界には社会は存在する。がしかし、個人は、すくなくともその出発点においては、自分ひとりの世界にとじこまっているのではないだろうか。物語の前半において、登場人物たちは Boston の社会があるゆえにかえって孤独であり、清教徒の集団が厳存するゆえにかえって個人は自分の殻に閉じこもるのだ、という印象を持つのは、僕だけであるだろうか。

Boston の市民たちは、女主人公 Hester に緋文字をつけることを要求する。それはこの社会の掟であり、いかにも社会的拘束力をもつかに見える。だが、実際のところ、この緋文字は Hester を Boston の社会から遠ざける結果を生み出すだけであつたのだ。彼女にとって、「この世の法律なで彼女の心の法則ではなかった」と Hawthorne は書いている。Hester は「古風な偏見の体系」を捨て去り、「思索の自由」を身につけていたが、それは Boston の人々にとっては「緋文字で非難したよりも恐ろしい犯罪」に思われたほどであつた。言ってみれば、*The Warden* の世界を支える「この世の法律」は *The Scarlet Letter* の世界では自由に投げ捨てられていたことになるのであり、このことは逆に周囲の社会の変化が Hester には何の意味を持たないことにもなる。いかに Boston 市民の彼女に対する評価が変わっても、彼女自身は自分の世界にとじこまっている。*The Scarlet Letter* はまず何よりも個人の魂の物語であり、孤独の世界への探求に他ならないのだ。

さらに言えば、*The Warden* において、社会機構から逃れることは主人公の生活の危機をひきおこすことになっていた。寺院町という社会の重みが、そのまま個人の安定感につながっていたのだ。がしかし、*The Scarlet Letter* においては、Boston の町の拘束力はたちどころに Hester を圧迫し、苦しめる。Boston に住むことは、彼女にとって「恥辱の典型」となることを意味していたのだ。とすれば、彼女が最も幸福で自由になり得るのは一体どこにおいてであるのだろうか。奇妙なことに、それは森であり、そこでは彼女は「恥辱のしるし」を投げ捨て、「恥や苦しみの重荷が魂から消えて行く」のを感じるのだ。「希望」や「未知の幸福」さえ生れでてくる。しかも、この森は「未開異端の自然の森」であり、「人間の掟にも従わず、より高い真理にも輝かない」世界に他ならない。社会からの開放は、Hester にとって自由と幸福を意味していたのだ、と結論できるのではあるまいか。

これまで、僕は *The Warden* における社会の機能を、*The Scarlet Letter* の場合と比較しながら、いかにも独断的な観察を試みてきた。僕の見てきたところでは、たしかに、この二つの



作品は「社会」の機能をめぐって全く反対の方向に発展している。先に引用した *Times Literary Supplement* の論者の言葉をかりて言えば、*The Warden* が社会的人間を描いているのに対して、*The Scarlet Letter* は反社会的人間を描いているとも言えよう。あるいは、前者は社会に重点を置き、後者は個人に重点を置いておりと言い直してもいいかも知れない。しかし、僕自身この考えが独断的であることを認める。社会と人間との関連性をそれほど単純に創り切ることができるはずもない。「社会」という斧は切れ味はいいけれども、微妙な小細工には不向きであることは僕とても承知している。

実のところを言えば、*The Warden* と *The Scarlet Letter* のいずれにおいても、僕は物語の前半部を問題にして来たにすぎない。物語自体を尻り切れとんぼのままに放置して、社会の機能を論じ、個人の生活の安定について説明を加えていた次第であったのだ。その限りにおいて、二つの作品における社会観についての僕の考えは一応正しいと言えるであろう。問題は物語の後半部において、その社会と個人との関係に変化が生ずるか否か。かりに変化があるとすれば、それは何を意味するのか。こういった疑問に答えるのは、僕の当然の義務でなければならない。

### III

*The Warden* において主人公 Mr. Harding は社会の拘束力のある機構に身をゆだねているとき最も幸福であるはずだ、と僕は書いておいた。このことは、すくなくとも物語の冒頭部分においては正しいし、例の裁判沙汰が持ちあがってからでさえも、問題解決のために Mr. Harding をはじめ娘婿の Dr. Grantly などが奔走することから察して、やはりある程度まで正しいと言えよう。がしかし、事件が無事法律的に解決したという情報を耳にしたときの Mr. Harding の反応はいかなるものであったか。

事件が片付いて、Mr. Harding にはなんの責任はなく、従来通り “warden” の地位に在職し得ることが判明する。だが、彼はその裁定を素直に受け入れることはできないのだ。彼には「満足して晴れ晴れとした心の輝き」など全然見られない。彼にしてみれば、仮に法律的には晴天白日の身であることは証明されたとしても、新聞などから攻撃された深傷の痛みは消えていない。はたして “warden” の不正行為に対する摘発は事実無根であったのか。「悪名」をすすぎ、世間に「無実」であることを証明できるまでは、心の安らぎなど見出すことはできないと思うのだ。勿論、娘婿は法律を楯にとり、寺院内の事情を説明することによって、Mr. Harding に万事をそのまま飲みこむことを要求する。

たしかに、娘婿の説得の言葉は社会という枠組の中では正しい。それは組織の中で苦悩する個人の魂には何の関心をも示さない発言であるのだ。Mr. Harding は彼の言葉の中に「重々しく、感情のない、答えるすべのない真実」を感じる。そこには「实际的ではあるが、おどましい常識」が充満しているとも思う。にもかかわらず、彼は苦しむ。彼が苦しむのは「彼自身の立場の正しさが自分で納得」できないからであり、「彼が我慢ならないことは、他人から非難されることであり、自分自身が無罪放免できないこと」であったのだ。

ここで Mr. Harding は大きなジレンマに直面せざるを得ない。Barchester の狭少な「社会」に生活する彼にとって、娘婿の Dr. Grantly の言葉にひそむ「真実」に耳をかたむけ、その「常識」に従うことは、そのまま彼の老後の生活の安定を意味していた。社会と個人との強固な結びつき——これは僕がすでにくりかえし述べたところであるのだが、彼にとって平穩無事な生活の保障は自分の立場の正しさを追求することではなく、社会全体のバランスを考慮することによる以外はない。にもかかわらず、娘婿 Dr. Grantly の言葉に従うことは彼自身の精神の自律性を失うことに他ならない。「社会」に対して忠実であることによって生活の安定をとるべきか、自己に忠実であることによって不安な人生の門出に立つか、二者択一をせまられる Mr. Harding の苦悩は、*The Warden* 一巻の、実は最大の山場と呼んでもいい部分であるのだ。

落ち着かぬ幾日かのあと、Mr. Harding はついに心を決めて London に出奔する。例の裁判を担当することになっていた高名の弁護士の意見を聞くことにより、善後策を講ずるつもりであったのだ。この弁護士にむかって彼は“warden”の地位を辞し、“precentor”の職とほかの小さな地位から入る収入だけで暮す決心を語るのだが、その馬鹿げた振舞いに対して弁護士は彼を狂人扱いにしかねない有様であるのだ。周囲の強固な反対にもかかわらず、Mr. Harding は断固として彼の決心をつらぬき、彼自身の心の安らぎを得ることに成功する。

とすれば、*The Warden* においては、「社会」は決して万能ではないではないか。強力な拘束力にもかかわらず、個人の自由な意志が通用するのではないか、という疑問が当然僕らの頭にくんでくる。たしかに、Mr. Harding は「社会」の「常識」に背をそむけて、彼自身の安定を彼自身の判断で見出したかに思われるかも知れない。彼は「社会人」というよりは「自由人」であり、「社会」の枠組をのりこえたところに彼の精神の自由さがうかがい知れるのではないか——などという早急な結論には、僕はにわかに賛同しがたいのだ。

なるほど、Mr. Harding という一個人の行動のパターンを追いつめて行くとき、たしかにそこには「社会」の重みは感じられないかも知れない。だが、ここで立場をかえて、社会の巨大な組織の中の一人としての Mr. Harding に焦点をあててみよう。いささか俗物的な臭いは否定で

きないにしても、彼の娘婿 Dr. Grantly は Barchester の “archdeacon” であり、いわばこの小社会の元締としての重要な地位を占めている。彼の発言はこの社会の「常識」であり「真実」であって、彼の意見に従うことは「常識」の線に沿った行動をすることに異ならない。そして、*The Warden* の場合、「常識」に従うことは、そのまま生活の安定を確保し社会的な地位を保持することに他ならないのだ。

この基本的パターンにおける Mr. Harding の行動は明らかに異端者的である。しかし、彼は「常識」に反抗しているかに見えながら、実は「常識」に合致しないがゆえに社会的地位から追放されるという結果をもたらしているにすぎない。言いかえれば、「常識」の世界に安住するためには、Mr. Harding は彼の良心や立場については眼を閉ざし、「常識」の鋳型に彼自身を合致させねばならぬ。これができないまま、彼はその「常識」の世界から脱落し、従来とは異った社会的地位を占めることによって全体のバランスを保つのだ。一般的に言って、この人物裁断における「常識」という基準の重要な働きはイギリス小説の特性であり、「非常にしばしば、狂気じみたり異常なまでに非現実的な現想、それゆえに社会秩序に必要な妥協や不完備さと矛盾する理想を是正するために常識が呼びこまれるのに気づく」という Richard Chase の発言<sup>(5)</sup>は、*The Warden* にもあてはめて考えることができるのである。

ここまで話を進めてくると、Trollope の世界において、個人はいかに自由な行動を取るように一見思われるとしても、その実は社会のもつ拘束力から決して自由であるとは言えない。いや、自由に行動すればするほど、かえって「社会」のもつ包容力の大きさが認識されることになり、社会の重みが意識されざるを得ないのだ。社会の中での反抗的な行為がそのまま社会のもつ壁の厚みと弾力性の確認につながっている世界——これを *The Warden* の世界と規定できるのではあるまいか。社会の中の個人の物語として、Mr. Harding の物語を読み進めることを強調したいのだ。

ところで、この *The Warden* に個人と社会とをめぐって微妙な交渉のあることが認められるとすれば、同様の事態が *The Scarlet* にも見受けられるにちがいない。僕はさきにこのアメリカ小説について社会が個人に対して強固な拘束力を示していないことを指摘しておいた。一見いかにも厳格な清教徒社会の裁断は、Hester との連帯を増大させるものではなく、かえって彼女を孤独の世界に追いやり、彼女自身の「法律」をもつことを許すことになったことも説明しておいた。彼女は森の場面において、緋文字を投げ捨て、Boston からの脱出を牧師と計画する。彼

---

(5) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (Doubleday & Co., 1957), p.158.

女にとって、七年間の忍従の生活は、この脱出のための準備にすぎなかった、とさえ作者は書いている。にもかかわらず、巻末近くにおいて僕らが彼女を見出したとき、依然として彼女は Boston に留まり、むしろこの社会の忠実な一員として罪ほろぼしの生活を送っているかに見える。かつての社会に対する反抗者としての彼女はどこへ行ったのか。「真実の新生活」を求めようとする彼女の夢はどこへ消えてしまったのか。

たしかに、Hester は「彼女の法則」だけに支配されている女性であり、「思索の自由」を身につけていることは否定できない。その「自由」は彼女が胸につけた「恥辱のしるし」によってもたらされた自由であり、Hawthorne が記しているように「それが示している社会的な立場が、Hester 自身の心に及ぼしている効果は強く特殊なものであった」のだ。とはいうものの、この緋文字はほかならぬ彼女の反抗する Boston の社会から彼女に与えられた罪のしるしであることも否定できない。こう考えて来ると、Hester のきわめて自律的と思われる個人的で自由な行動の世界は、実は鉄のごとき Boston の社会によってはじめて可能にされた世界であると言ええるのだ。

Hester は森の中で緋文字を投げ捨てるけれども、生きた緋文字のしるしに他ならぬ Pearl の視線を受けて、またもとの胸につけ直すことになる。彼女には Boston の社会をはなれての完全な自由はあり得ない。そのいまわしい緋文字を胸につけることによって、言いかえれば、彼女を排斥して止まない社会の強制するしるしを常に意識することによって、はじめて彼女自身の世界が成立することができるのだ。Hester を拘束しながら同時に自由を与えるこの緋文字の二重の機能は、*The Scarlet Letter* における社会と個人との関係を微妙に表象しているのかも知れない。

この二重性が、*The Warden* の場合のごとく、社会における個人の立場を意味していないことは明らかである。といって、Hester は社会と全く無関係な個人というわけでもない。きわめて図式的にいえば、Hester という女性には Boston という秩序正しい社会と森という自由な個人的な世界とが対立しているのであり、彼女としては後者の世界に生きることを欲するけれども、結局は前者の社会の中にくみ入れられてしまうのだ。言ってみれば、「社会」は「個人」に対立する概念として把握するのが最も適切なのではあるまいか。この「社会」と「個人」の対立という二面性ないしは二重構造を、*The Scarlet Letter* の特徴と考えるのだ<sup>(6)</sup>。

---

(6) この点について、もっと詳しい説明を拙稿「*Wuthering Heights*のアメリカ性(?)」の中で与えておいた(大阪外国語大学、英米研究5号所載)。

*The Warden* において、個人はいかにあがいても社会の巨大な枠組から抜け出すことはできなかった。「社会的人間」になることを余儀なくされていたのであった。もちろん、*The Scarlet Letter* においても個人は最后には社会の組織の一員とならざるを得ない。がしかし、すくなくともこのアメリカ小説においては、個人は社会に対立する存在として登場としている。個人的世界をとるか、社会的組織をとるか、という二者択一の形で提出されているのだ。「社会的人間」には想像すらできない世界であるにちがいない。Hawthorne の作品において、個人は社会に反抗する。反抗することによって彼自身の世界をもとうと努力する。社会は個人から幸福を奪い去り、なければならぬ越したことの無い恥部のごとき存在であった。ここに Hester が緋文字を投げすてる行為の意味がある。がしかし、この「社会」から個人はなんとしても逃げきることではできぬ。このどうにもならぬ重荷の社会といかに対決するか——この主題は単に Hawthorne の小説にかぎらず、アメリカ小説一般に取り扱われていると言ってもよいだろう。

とすれば、*The Warden* が社会の中の個人の物語であったのに対して、*The Scarlet Letter* は社会に対立する個人の物語と規定できるのではあるまいか。もちろん、僕は Hawthorne を含めて一般にアメリカ小説に接する場合、あまりにも、この社会と対立する「個人」にのみ重点をあてて読みすぎる傾向がある。たしかに、強烈な個性をもった登場人物が描かれていることは事実である。*Moby Dick* にしても、*Huckleberry Finn* にしても個人の世界の目くるめくばかりの見事さに僕は思わずひきずり込まれるのだ。がしかし、この「個人」にのみ注意することは、その「個人」と対立関係にある「社会」の存在をややもすれば忘れ去るという結果をもたらす。*The Scarlet Letter* においても、あまりに Hester にこだわることは、この「社会」と対立する「個人」という二重像を見落すことになりかねない。Norman Holmes Pearson が巧みに指摘しているごとく<sup>(7)</sup>、「孤独の苦悩をアメリカ文学の主題として強調する」ことは、「それが実は底を流れる強烈な社会を求める気持の証左であることを認めない」ことになるであろう。

ともあれ、僕は「社会」と「個人」という概念をもちこむことによって、*The Warden* と *The Scarlet Letter* の世界の基本構造を規定しようと努めてきた。僕自身としては舌たらずの説明になったことを強く感じているが、<sup>(8)</sup>ここで奇妙なコントラストに気付かざるを得ない。*The*

---

(7) Norman Holmes Pearson, "The American Writer and the Feeling for Community," *Some American Studies* (あぼろん社刊1964年), p. 21.

(8) ここで日米小説を比較した Earl Miner の次の発言を思い起して欲しい:「私は(日米文学の)そういう違いよりもむしろ、重点の置き方について語るべきであったのであるが、こういう場合は問題の輪郭をなるべくはっきりさせることが必要なのである。」「日本を映す小さな鏡」(筑摩書房刊, 昭和37年) 136頁。

*Warden* において、主人公が社会の枠組から脱け出そうとする反抗の姿勢は、実は結果的にはその社会のもつ拘束力の強大さを裏付け、彼があくまでも、「社会的人間」であることを証明することになっていた。逆に、*The Scarlet Letter* において、女主人公は最后には社会の一員としてその枠組の中にくみ入れられることになるけれども、それはかなりの紆余曲折を経てからのことであり、それだけにかえてその女主人公と社会との距離感を読者に感じさせ、反社会的な人間としての彼女の姿勢を浮き彫りにせずにはおかないのだ。

最後に、この二つの小説の性格を端的に表現していると思われる場面を取り出すことによって、両者の相違を明らかにしておこう。

*The Warden* においては Mr. Harding が、*The Scarlet Letter* においては Hester が、それぞれ社会に対する自分自身の立場を明らかにする「決定的瞬間」が一つずつ用意されている。この場合、僕にとって興味深いのは、Mr. Harding も Hester も彼らの「社会」から離れた場所で「社会」に背をそむける決心をしていることなのだ。Mr. Harding が彼の社会の常識に従うことを拒否する決意をかためるのは、London においてであるのに対して、Hester が緋文字を投げ捨てるのは未開の森の中においてである。前者の場合、あくまでも London は Mr. Harding の「社会」たる Barchester の延長にはかならず、ある意味で反社会的な彼の決心さえもが所詮は社会という枠組から抜け出し得ないことを象徴的に物語っているといえないだろうか。これとは対照的に、Hester の森は Boston の社会とは対立する世界であり、そこでの Hester の行為は当然のことながら、個人的な次元の意味しか持ち得ない。だが、自然という場を Hester に与えることによって、Hawthorne は社会と個人の対立関係を暗示しているのではないだろうか。あまりにも身勝手な解釈とばかりは言えないように僕には思われるのだ。